

1979年10月28日の早朝 死火山と思われていた木曾の御嶽山(標高3,063.4m)は 突然白煙をあげて爆発し 降灰は木曾地方一帯から北関東にまで及んだ。さらに1984年9月14日の長野県西部地震(M=6.8)では 御嶽山南斜面に発生した大規模な崩壊が 岩屑なだれとなり貴重な人命・財産を呑みこんだことは 記憶に生々しいところである。

このような「要注意」の御嶽火山をその東端に含む御嶽山地域は 岐阜・長野県境の峻険の地ということもあって 本格的な地質調査は困難をきわめ 公開された資料は少ない。それだけに 今回の地域地質研究報告の出版は 各方面から熱い期待をもって望まれていたものである。

136ページにのぼるこの研究報告では 御嶽火山とその基盤岩とにそれぞれ半分がさかされている。

基盤岩は 古い方から 北東部に分布する美濃帯中生層(三畳系—ジュラ系) 全域に分布する白亜紀後期の濃飛流紋岩類およびそれに関連する半深成岩類 北部—北東部に分布する 鮮新世の丹生川火砕流堆積物(デイサイト質)と鈴蘭高原玄武岩とに分けられる。

濃飛流紋岩類は 10数枚の火砕流堆積物に区別され それらの産状・岩質・鉱物組成・化学組成・フィッシュントラック年代等が詳しく記述されている。 そのうち最も初期の「小坂火砕岩類」は美濃帯中生層の巨大ブロック(径数十—数百m)を含み かつての火口付近に堆積したものらしい。 後期の「瀬戸川溶結凝灰岩層」については 地熱探査用ボーリングコアの観察から 1枚のターニングユニットの厚さが700mを超える大規模火砕流であることが 実証された。



御嶽火山の活動は カルデラ形成とそれに続く長い削剝期間をはさんで 古期と新期に大別され 新期噴出物はさらにデイサイト—流紋岩質の「継母岳火山群」と安岩質の「摩利支天火山群」に2分される。 カルデラの山存在は 重力探査の結果からも支持されている。 地質図に図示された溶岩層・火砕岩層は 20数枚に達するが この層序区分の基礎には 御嶽山東麓における詳細なテフラ層の研究がある。 添付された数多くのルートマップ・写真・スケッチ等は オリジナルな資料としてきわめて貴重なものであろう。 付表に掲げられた火山岩類の化学分析値53個のうち 36個は新データである。 1984年御嶽岩屑なだれ堆積物についても 特に章を立てて説明している。

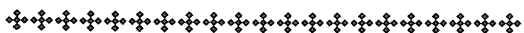
本地質図と西隣の「萩原」図幅が同時に出版されたことにより 富山から浜松に至る日本列島の最も幅広いトランセクションが 大縮尺の地質図によりカバーされたことになる。



5万分の1地質図幅の新刊

御 嶽 山 ONTAKE SAN

5万分の1地質図幅 地域地質研究報告



著者 山田直利・小林武彦
 発行 工業技術院 地質調査所
 取扱先 東京地学協会 (03) 261-0809 262-1401
 日本産業技術振興協会 (0298) 52-3388
 そのほか全国主要書店

販売価格 2,700円

1988年9月号

地質ニュース	第409号	9月号
昭和63年9月1日	定価 ¥650	〒実費
編集	発行	
集 集	工業技術院地質調査所	
発行人	林 久	雄
発行人	株式会社実業公報社	社
発行人	東京都千代田区九段南4の2の12	〒102
	Tel. (03)265-0951(代表)	
	振替口座 東京1-32466	
総発売元	株式会社 実業公報社	出版事業部